



2025

1月
令和7年
No.105

林野庁 森林技術総合研修所 広報誌
Forest Training Institute of the Forestry Agency

- 巻頭言 年頭所感 1
森林技術総合研修所長 嶋田 理
- 新設コースの企画から実施まで <寄稿>
林野庁計画課 森林情報整備・公開調整官 .. 2
- 令和6年度研修の実施状況 4
- 研修紹介 集材架線研修 5
- 持ち帰った研修資料の活用法 教務指導官
FTIクイズ 問題 6

- 高尾の四季 リターンズV 7
- 読んでもらえる広報誌へ
FTIクイズ 答え 8

Webアンケート（4問）への御協力をお願いします。

[森林研修所ニュース第105号](#)
[読者アンケート](#) ←クリック！



巻頭言

年頭所感

森林技術総合研修所

所長 嶋田 理

令和7年の年頭に当たり御挨拶を申し上げます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

森林技術総合研修所が実施する今年度の研修につきましては、本所及び林業機械化センターを合わせ、昨年末までに66コースが終了し、のべ1,913名に受講していただきました。

研修生を始め、講師や見学先等の関係者の皆さまの御協力にあらためて感謝を申し上げます。

年が明けたことから、年度内は残り6コース（うち2コースは通信研修）の円滑な実施に努めるとともに、来年度の準備も鋭意進めてまいり所存です。

さて、今年の干支は乙巳（きのとみ）で、「これまでの努力が結実する年、再生や変化を繰り返しながら発展していく年になる」といわれています。

前回の乙巳の年（昭和40年）は、木材輸入自由化の翌年に当たり、山の現場では拡大造林が盛んに行われていた時期でした。その後、当時造成された人工林資源が利用期を迎えていることは周知のとおりです。



60年を経て再び巡ってきた乙巳の今年、関係者が紡いできたこの間の努力が、森林・林業・木材産業の発展や地域の振興という形で実を結ぶことを心から期待しています。

また、今年4月には、かつての林業講習所が現在の森林技術総合研修所に生まれ変わってから、ちょうど30年の節目を迎えます。

森林・林業等の各分野で活躍する技術者を育成するためには、研修生が受講を通じて習得した知識や技術をそれぞれの持ち場で積極的に活用していく必要があります。

当所としましては、人材育成が果たす役割がますます重要性を増していることを認識しつつ、日々進化・発展する技術や施策の動向等を丁寧に掬（すく）い上げ、研修手法・技法についてもさらに工夫を凝らしながら研修内容の充実を図ってまいりたいと考えております。

引き続き皆さまの御支援・御協力をお願いしつつ、年頭の御挨拶とさせていただきます。

新設コースの企画から実施まで

当研修所では時代のニーズを捉えた研修内容の改善を図っています。その目玉となるのが研修の新設で、令和6年度は「森林計画(情報処理)研修」を立ち上げたところです。林野庁講師陣のリーダーとして、本コースの企画段階から実施に至るまで活躍した室木氏に寄稿していただきました。

地理情報を扱える 技術者を増やしたい

林野庁計画課

森林情報整備・公開調整官
室木 直樹



1 研修の新設に至った経緯

私は、航空レーザ計測などのリモートセンシング技術やGIS（地理情報システム）の活用に関する施策の企画・立案及び技術指導を担当しており、その一環で、森林技術総合研修所が実施する「森林作業システム研修」「地域林政アドバイザー研修」などで講義を受け持っています。

現在の業務を担当し始めてから2年が経過したところですが、これまでの研修では、GISを取り巻く状況など総論的な話をするに留まり、「GISの操作技術が身に付く研修」を提供できないことに課題意識を持っていました。“GISって便利”という話をしたとしても、「聞かされるだけでは、今一つ実感が湧かないな」といった眼差しを感じていたからです。

他方で、研修を提供するサイドとしては、地域によって導入されているソフトウェアも異なれば、持ち合わせているデータの種類も異なる中、林野庁が地域横断的な立場で、具体的にGIS操作を伴う研修を企画することが難しかったのも事実です。

このような情勢の下、近年のPCの処理能力の向上とともに、オープンソースソフトウェアでありながら利便性が増してきたQGISを活用すれば、地域の事情に囚われることなく均質な学習が可能となるだろうと考え、研修所に協力を求め、令和6年度新規コースとしてQGISの演習を中心とする「森林計画（情報処理）研修」を提案しました。

2 QGISとの出会い

私とQGISとの出会いは、「平成28年熊本地震」で被災した九州森林管理局勤務時代に遡ります。当時は民有林と国有林が一緒に描かれた地図がなく、どの林道とどの林道が繋がっているかも分からないという現実を知り、自分で地図を作りたいと思ったことがきっかけでした。大学では森林科学を専攻していたため、講義で何回かGISを触ったことはあっても、“GISってあるよね”くらいの存在に過ぎず、GISについて本格的に勉強しようと思ったのはそのときが初めてです。

“この技術を身に付ければ、きっと将来に役立つ”と信じ、業務過程で学習を続けました。例えば、宮崎森林管理署の綾森林事務所に転じた際は、地域支援として綾町森林整備計画の検討委員会に参画し、町役場の職員とともに公益的機能別施業森林の区域図（いわゆるゾーニング図）を作成（図1）したり、宮崎署勤務時には、紙書類で管理されていた分収造林台帳の電子化に取り組んだりしました。さらに本庁森林利用課では、森林経営管理制度の取組状況の全国マッピングを行うなど、事あるごとに「資料の地理空間情報化」に努め、実践力を身に付けてきました。

振り返ってみれば、私は「新しいツールはとりあえず使ってみよう」「資料はこだわって作りたい」「業務はとことん効率化したい」といった性格であるため、結果的にGISとの相性が良かった訳ですが、広く行政職員一般にその考えが当てはまるとは限りません。

他方、業務では、「A地域とB地域の比較をしない」「XとYの条件に合致する地域を探さない」というときにExcelを使うことはよくあると思います。また、A地域とB地域を取り上げた資料をPower Pointで作る際は、Google Mapなどのスクリーンショットに丸や矢印の絵を描いたりしませんか。それを一括して実行でき、さらに自在に資料表現ができるところがGISの良いところです。目先の業務としては、使い慣れたExcelやGoogle Mapのほうが手取り早いこともありますが、関心があるようでしたら、日々少しずつでも使ってみる習慣を身に付けてほしいと思います。

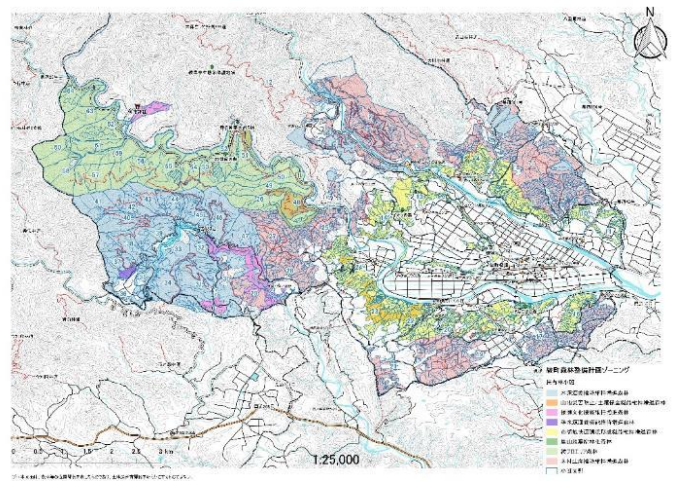


図1：初めての公表資料「綾町森林整備計画のゾーニング図」。林小班に色を塗っただけですが、今となっては良い思い出です。

3 使えるようになって良かったという確信

私自身これまで、GISの活用に関しては半ば趣味のような世界でしたが、令和6年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」の対応を巡り、“GISが使えるようになった”との確信を得ることになりました。私の出身地は被災地域の石川県能登地方で、ありがたいことに職務とスキルとがマッチングし、被災地域支援としての航空レーザ計測事業を地元貢献の意味合いももって担当しています。このときに、“データを取得しデータを見える化する”というGISの本領において、自らの技術を活かし、被災地支援に取り組めることの充実感を得ることができたのです。



写真：講義する執筆者

4 初開催を終えて

当年度事業の最盛期を迎え、来年度予算の編成も始まるなど、非常に多忙な時期にもかかわらず、GISに専念してみたいという熱き想いを抱えた研修生が全国から多数集まり、初開催することが叶いました。

初回であり、どのようなレベル感の研修生が集まるのかが見通せない中で研修教材を用意したため、皆さんの期待に応えられるか実は不安でした。それでも、「研修で学んだ複数のツールを組み合わせる自らの職務を表す1枚の地図を作る」という修了制作まで真摯に取り組んでいる姿を見ることができ、安堵しました。

例えば、林地開発許可を担当する県職員が、実際の案件を想定しながら作図をするなど、個々の機能を実務に落とし込むという「知識から実践へ」の言葉どおりの姿もみられ、「技術を身に付ける研修」を実施できたことは、講師陣としても励みになったところです。

研修教材の改善や時間配分の最適化に向けたヒントも得られたことから、地理情報を扱ってみたいと思う技術者を一人でも多く増やせるよう、引き続き工夫を重ね取り組んでいきたいと考えています。

5 QGISを使ってみたい方へ

QGISはオープンなソフトウェアであり、使いたいと思う人に常に開かれた存在ですが、組織的・恒常的に使われているものではないため、市販本や指導者が少ないなど、必ずしも学習機会が安定しているとはいえないことが課題です。

そこでQGISを使える人が増えてほしいという思いに賛同してくれた林野庁職員6名が集い、研修所のサポートを得ながら、3日間とことんQGISを学習できるという、稀有な研修カリキュラムを用意してもらいました。



写真：講師陣（右端が執筆者）

講師陣としても、より多くのQGISユーザーを輩出し、そのユーザーから新しいユーザーが増えていき、みんなで技術力を研鑽し合えるようになることを楽しみにしています（実際に、今回の研修過程において、研修生の質問から新しい機能を発見したりしました。）。次回の研修も開催できるよう、奮って御参加をお願いします。

執筆者：室木 直樹（むろき なおき）

2013年に大学を卒業後、木材商社の営業マンを経て2015年に農林水産省入省。九州森林管理局在勤中にGISやリモートセンシングに関する経験を積み、現在は林野庁計画課においてリモートセンシングの活用や森林情報のオープンデータ化などに関する業務に従事。

崩壊箇所等位置図(地形変化量) 図郭番号:07ED684

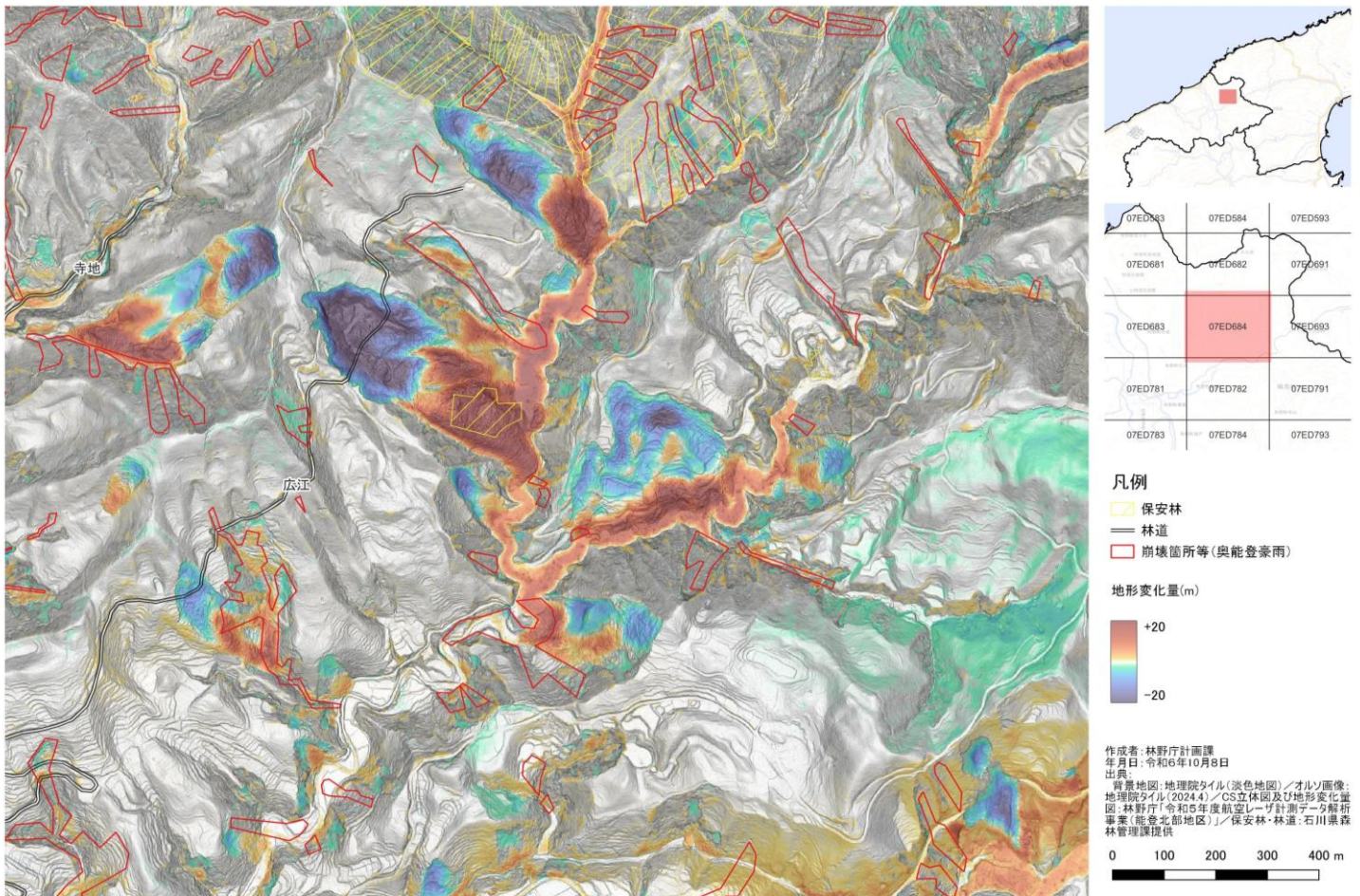


図2：図1のときにはできなかった技術を組み合わせた最近の渾身作。
1月の地震及び9月の豪雨による被害状況と、林道・保安林の位置を重ねた地図帳の1枚。

令和6年度研修の実施状況

令和6年度に実施する研修も残り数コースとなりました。
本稿では、今年度に計画した研修の実施状況等について振り返ります。

➤ 5年ぶりに全ての新採用研修を【4月】に実施

「一般職（大卒程度・高卒者）新採用研修」は、近年、コロナ禍により開催時期が流動的となっていました。今年度は総合職を含めて4本の新採用研修を全て採用直後の4月に集合方式で実施しました。

それぞれのカリキュラムに取り組んだ新規採用者は、全国の同期と親睦も深めることができました。

高卒者研修では、訓示後に青山豊久林野庁長官自らが研修生39名一人ひとりと握手を交わされるというサプライズがあり、そのときの様子は「森林研修所ニュース」第102号のp.12(下記事)で取り上げました。

長官訓示では、世論調査からみた「国民が期待する森林の働き」と、義務教育において「森林資源は大切」と学んだ人達の推移をデータに基づいて説き、併せて「一日も早く仕事に慣れること」「世の中で何が起きているのかよく知る事」「何を覚えたら世の中がよくなるのか考えること」という3つのアドバイス等がありました。

また、高卒者研修での訓示（4月23日(火)）が行われた後、長官自らが研修生39名一人ひとりと握手を交わされるというサプライズがありました。

4月15日(月)に本庁で訓示を受けた総合職採用者も含め、林野庁トップからのメッセージは同時期に働き始めた若者たちの胸に深く刻まれたことでしょう。

令和6年度一般職（大卒程度・高卒者）新採用研修を森林技術総合研修所で実施しました。コロナ禍の影響もあり、入庁後間もない時期の一般職新採用研修は5年ぶりです。

大卒程度の採用者が総勢90名を超えるため2コース（各2泊3日）に分けたカリキュラムを調整し、4月10日(水)のお昼を挟んで2回の訓示が実現しました。

➤ 台風の影響で3コースをやむを得ず中止【9月】

超ノロノロの台風10号は、8月最終週から9月頭まで1週間にわたり日本列島の広い地域に大雨をもたらし、各地の交通機関へ影響がありました。

研修所本所と林業機械化センターでは、研修生・講師の移動や講義等における安全確保を優先するため、3本の研修が中止を余儀なくされました。

【台風の影響により中止とした研修】

- ✓ 森林計画（森林調査・森林情報管理）研修
- ✓ 森林立地・施業技術研修
- ✓ 高性能林業機械（基礎）2研修

自然災害の影響をもろに受けたといえば、9月19日に大粒の雹（ひょう）が降ったことが挙げられます。官用車、屋上配管、外灯等が被災したものの、幸いなことに研修の遂行には支障がなく、新たな外灯はより明るく構内を照らしてくれています。



➤ オンライン研修の需要が顕著に【6月】

今年度はオンライン研修を16コース計画しました。「市町村林務担当者研修」もその一つです。集合方式では、受講できる研修生の数（昨年度実績32名）が限られ、市町村の母数に比べ少ないのではないかという意見が出たため、潜在需要を掘り起こすべく、遠方からも受講しやすいなどの利点を活かせるオンライン方式に組み直して実施することとしました。

応募者は150名を超えるなど狙いは的中。一度に大勢が受講できるオンライン研修を必要に応じて適切に実施していきます。

なお、配信ツールは「GSS（ガバメントソリューションサービス）」に依り「Teams会議」を用います。林野庁職員向けでは「Teams機能フル活用」を、地方公共団体や林業事業体向けでは「不具合を生じさせない」をモットーに、これからも研修所職員間で情報を密に共有し、運営していく所存です。

➤ 模様替えで大教室の使い勝手が向上【8月】

本所にある2つの大教室のうち、第4教室には、キャスターがない木製机が「スクール型」に設置されていたため、グループワーク用に机の位置をアレンジするには不向きでした。そこで、8月末に各教室等のキャスター付き長机をかき集め、椅子とともに再配置を行いました。

机等がリユースならば、作業も職員実行。見事に「島型」化が容易な教室に生まれ変わりました。なお、木の温かみが感じられる元の机はその後、オンライン配信専用教室（通称：スタジオ高尾）などで活用されています。

➤ 新設コースが大盛況・高評価【10月】

地理情報システム(GIS)による森林情報の解析技術が必須となっている中、オープンソースソフトウェアとして無料で使用できる「QGIS」のニーズが高まっています。

これを受けて、QGISの基本操作・演習を柱とする「森林計画（情報処理）研修」を新設したところ、計画15名に対し実績25名(応募39名)と大盛況で、研修生アンケートの結果、全体・科目別ともに極めて高い評価を得ました。

(本誌pp.2-3参照)



第4教室に「島型」で設置した森林計画（情報処理）研修



○集材架線の基本説明

・例えば胸高直径30cm、樹高20mのスギ材（枝葉付きの全木）の重さは700kg以上にもなります。路網が整備されておらず重機が入れない箇所では伐倒した木材を林外に搬出するのは、困難性が高い作業です。

・このようなときに集材架線が活躍します。支柱間に張ったワイヤロープ上を移動する搬器に木材を吊るして運搬する方法で、索張りの基本的な方式は10数種類に分類されます。

・それぞれ特徴がある中で、林業機械化センターが行う研修ではエンドレスタイラー方式の架設や運転、撤去などの技術を習得することができます。

・急峻な地形での集材に適した方法ではあるものの、ベテラン作業者のリタイヤ等により、技術者の育成が課題となっています。



まずは模型で作業手順を確認



主索の巻取り作業（撤収）

○エンドレスタイラー方式の概要

・搬器を載せる主索は、ワイヤロープの直径が大きいもの（本研修では直径24mm）を使用します）。

・実習で架設する際の延長は110m程度ですが、実際の現場では600～1,000m以上に達することもあります。

・このほかに3種類の作業索（本研修では直径10～12mmのワイヤロープを使用し、用途別に「荷上索」「引戻索」「エンドレス索」と呼ぶ）を集材範囲内に張り巡らせ、集材機のドラム操作（正転、逆転）により搬器等の位置を調整し3次元的に集材します。

令和7年度実施予定

○目的：集材架線の安全な架設・撤去、集材機の運転操作、架設設計等に必要となる知識及び技術を習得させ、的確な普及指導ができる者を育成する。

○対象者：地方公共団体職員、森林管理局・署等職員等

○計画人数：15名

○期間：令和7年5月下旬～6月上旬（11日間）
 <11日間のうち、土日は除く。>

○研修のポイント

・機械集材装置の運転の業務に係る特別教育（下欄参照）に基づいたカリキュラムで、修了者には修了証を交付します。

・講義と実習の時間比率はおおむね1:4。

○令和6年度研修生の感想

・「架設・撤去の作業を体験し、その方法や安全対策を理解することができた」

・「県でも主伐が増えていく中で必要な技術であり、普及指導に役立つ」等



3種類の作業索を架設



鉄製の搬器、重錘など



主索の張り具合を振動波法で確認

受講により取得できる資格等

本誌第104号（令和6年10月発行）から「受講により取得できる資格等」をシリーズで紹介しています。

今回取り上げた集材架線による作業では重量物を空中に吊るして移動させることから、力学的な知識や技術を有していなければならない、作業時には安全面への特段の配慮が欠かせません。

このため、機械集材装置（集材機）の運転の業務に就く際には労働安全衛生規則に規定された特別教育を受けている必要があり、右表に示した規定時間の教育を受講することで修了証の交付を受けられます。

なお、機械集材装置を用いた作業が一定要件である場合（支柱、中間サポート間の斜距離の合計が350メートル以上など）は、労働安全衛生法における「作業主任者を選任すべき作業」に当たります。当該作業を行う事業者は、林業架線作業主任者免許を受けた者のうちから作業主任者を選任し、作業指揮等を行わせる必要があります（本研修を受講しても、林業架線作業主任者の免許を取得することはできません）。

○機械集材装置の運転の業務に係る特別教育（労働安全衛生規則第36条第7号）の内容

	科目	時間
学科教育	機械集材装置に関する知識	3時間
	ワイヤロープに関する知識	2時間
	関係法令	1時間
実技教育	機械集材装置の集材機の運転	4時間
	ワイヤロープ	4時間



三胴集材機の操作実習



荷外し作業も慎重に

持ち帰った研修資料の活用法

ペーパーレス化を進めているとはいえ、本研修所では印刷したたくさんの資料を研修生に配付しています。受講して下さった皆さん、資料はどうしていますか。

- ・ファイリングして書棚に保管している？
- ・机の引き出しにただ仕舞い込んでいる？
- ・まさかゴミ箱にポイッと？



講師が丹精込めて作成して下さった研修資料を仕舞い込んでしまったら、おそらく二度と目にする事はないでしょう。

◆講義内容を全部記憶すれば大丈夫？

研修所職員としては、研修生の皆さんが学んだ事項を業務に活かすことが最も大切と考えています。講師側も資料を多めに準備される傾向がみられます。

人は忘れっぽい生き物で、いま記憶したことも3日後には約80%を忘れてしまうそうです(※1)。全てを記憶すること自体がそもそも無理なのです。

研修で学んだことを活かすための「**研修資料の活用方法**」を、3つのステップに分けて御提案します。

① 記憶するより記録する！

記憶力に頼ることには限界があるようですから、まずはしっかり記録しておきませんか。受講後の早い段階で、もう一度研修資料を読み返してみましょう。熟読ではなく流し読みで結構です。

このとき、目に留まった言葉やイラスト、図表等に、「付箋紙」を片っ端から貼っていきます。



その後、仕事中に「研修資料の中で見かけた言葉(情報)か?」という場面に出会ったら、先ほど貼った付箋紙を頼りに探してください。

FTIクイズ

今号のテーマは、2題とも林業機械化センターに関するものです。受講済の方もこれから応募を予定されている方も考えてみてください。

答えは
p.8

Q1：研修所本所は標高約200m地点にあり、そこから直線距離で約4km離れた高尾山の山頂は599mです。

では、群馬県沼田市にある**機械化センター**の標高に最も近いのは次のうちどれでしょう。

- ① 約400m (千葉県最高峰・愛宕山の山頂は408m)
- ② 約600m (高尾山山頂とほぼ同じ)
- ③ 約800m (長野県茅野(ちの)市役所庁舎は801m)

そうすると、意外とその言葉に早くたどり着き、結果として学んだときの記憶や知見が蘇り、知識が深まっていくものです。

なお、このとき「蛍光マーカー」を用いることはあまりお勧めしません。なぜなら、その資料を閉じてしまうと、蛍光マーカーが見えなくなるからです。見ないと、人は確実に忘れていきます(※2)。

② 一括して綺麗にファイリングする

付箋紙を貼り終わったら、研修資料を一括してファイリングしてください。この段階では「特に綺麗にファイリング」するようにしましょう。

綺麗なものには愛着が湧きます(※3)し、そういうものは身近に置きたくなるものです(大好きな人やペットの写真、大事な手帳を肌身離さず持っていたくなる心境と同じです)。

③ いつでもどこでも取り出せる場所へ

「綺麗にファイリング」した研修資料の保管場所はどこがよいでしょうか。仕事中の視界内にあって手を伸ばせばすぐに届く位置として、デスク上のPCモニター辺りをお勧めします。

机の引き出しや書棚、ロッカーなどに仕舞い込んでしまうと、①で「蛍光マーカー」をお勧めしなかったのと同じ理由により、その資料の存在自体を忘れてしまいます。人は視界に入らないと注意力が散漫になりがちである上、すぐに手に取れないと後回しにしてしまう傾向があり、これも忘れる原因の一つです。

◆来所時に受け取る紙資料を活かす方法を、3つのステップに分けて御紹介しました。ぜひ有効活用してください。

※1 エビングハウスの忘却曲線：H・エビングハウス(心理学)が1855年に発見。「子音・母音・子音」から成り立つ無意味な音節を記憶しその再生率を調べ導いた曲線。これにより、博士は忘れないための「復習」「意味付け」「記録」を推奨している。

※2 サフィックス効果：記憶や認知における心理現象の一つ。<読むより聞く、聞くより見る>方が印象に残るとのこと(認知心理学)。

※3 愛着形成：J・ボウルビィ(医学)に代表される理論の一つ。人や動物が特定の対象に対し形成する特別な情緒的結び付きのこと。例えば、大好きなペットをスマホの壁紙にしたり、スーツの裏地にプリントしたりするなど。

Q2：機械化センターの受講者は、寄宿舍棟「愛機荘」で寝食をとります。30室ある宿泊室の出入口には部屋番号とともに「あるものの名前」を書いた木札を設置していますが、それは次のうちどれでしょう。

- ① 山(赤城山や谷川岳など「ぐんま百名山」の一部)
- ② 木(スギやブナなどの樹種)
- ③ 花(リンドウやイチゲなどの山野草)

ゾウムシ

細長い口吻(こうぶん)をもつ姿を、鼻の長いゾウに例えたコウチュウ。

植物に穴をあけて産卵し、日本には1,200種以上が知られている。



カツオゾウムシ
くびれない流線形で、削る前の経節に見える。タデ科植物の葉を食べる。



ハスジカツオゾウムシ
灰白色の斜め線が特徴。幼虫はキク科のアザミやヨモギなどの茎の髓を食べる。



マダラアシゾウムシ
全身にこぶ状の突起がある。ヌルデやコナラなどの新芽を食べ、樹液にも集まる。



コゲチャツツゾウムシ
漢字で書くと「焦げ茶筒」で、淡褐色の微毛と黄褐色の粉に覆われている。



オオゾウムシ
日本在来のゾウムシ類では最大。長寿の個体は背面の粉が落ち黒色光沢を帯びる。



オジロアシナガゾウムシ
クズの茎にらせん状に穴を開け産卵する。幼虫は虫こぶの中を食べて育つ。



コナラシギゾウムシ
口吻はシギの嘴のように細長い。コナラやクヌギなどの実(ドングリ)に産卵する。

ハムシ

葉を食べるコウチュウで「葉虫」や「金花虫」と書く。

日本には800種近く確認されており、幼虫のときには根を食べるものもある。



カミナリハムシ
地面が湿った場所に棲んでおり、食草はチョウジタデ。



ニホンケブカサルハムシ
黄白色の毛に覆われ、ツバキなどの新芽によく集まる。



ルリマルノミハムシ
体長は4mm程度で、後脚腿節が発達している。



ヨツモンカメノコハムシ
前翅側辺に黒斑が4つあり、背面の外縁は透明な黄褐色。



リンゴコフキハムシ
体色は黒だが、全身が白い粉に覆われている。

2,800種を掲載した図鑑をゲット

令和6(2024)年7月中旬から約3か月にわたり、東京・上野公園にある国立科学博物館で特別展「昆虫MANIAC」が開催されました。

展示をじっくり見た後、ミュージアムショップで展覧会図録とともに購入したのは、九州大学総合研究博物館の丸山宗利・准教授が2年前に執筆された「昆虫学者、奇跡の図鑑を作る」という本です。

読後すぐに入手した「一切妥協なし」の有名昆虫図鑑は同氏が総監修・執筆・撮影を担当されたもので、本誌<高尾の四季リターンズ>の執筆でも活用しています。セットでの購読をお勧めします。

なお、同展は2025年夏に大阪で開催されます。

Biome (生き物情報収集アプリ)

Biome (バイオーム) は、スマホを使って生き物の情報を収集・記録していくもので、生物判定AIが写真から種名等の候補を示してくれますし、「しつもん」機能を使えば他のユーザーから回答やヒントが届きます。

いきものクエスト(クイズ形式のゲーム)やレア度判定は生き物の知識を習得するのに好適で、レベルが上がっていく仕組みは撮影の励みになります。ちなみに、筆者のBLv.は本号発行時点で“50”です。

令和6年11月の生物多様性保全研修では、「森林の生物多様性の把握と活用事業」という科目を新設。アプリ開発者で株式会社バイオーム代表取締役の藤木庄五郎氏に講義を行っていただきました。

広報誌「森林研修所ニュース」のコンテンツの幅を広げ、楽しみながら読んでいただける記事の傾向を把握したく、第103号で読者アンケートを実施したところ、回答者は12月25日時点で65名を超えています。

お答えいただいた方におかれましては、誠にありがとうございました。広報委員会一同、心より御礼を申し上げます。

いただいたコメントや御提案をヒントとして、第104号（令和6年10月発行）や本号において採用した企画もあります。

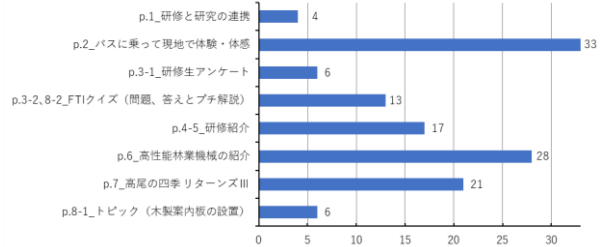
回答者の属性は、林野庁職員が最も多く62%、次いで地方公共団体職員が17%でした。民間企業・団体等の方からも御回答をいただきました（6%）。

本誌の存在については、林野庁職員を除く回答者のうち「以前から印刷物か又はWeb版の存在を知っていた」が33%にとどまったことから、さらなる周知が必要です。

次の設問（人気記事（2つまで選択可））の答えのトップはp.2の「バスに乗って現地で体験・体感」、2位はp.6の「高性能林業機械の紹介」、そして3位はp.7の「高尾の四季リターンズIII」でした。

バスのページは、“効果的な研修を全国で！実習地・見学地マップ”（第100号のp.12を御参考）のアレンジ版です。ランキング形式という通常とは異なる切り口に、「現地実習のイメージが湧いた」旨の感想が多く見られました。

ハーベスタ（高性能林業機械の一つ）の機能と操作方法を詳細に説明した記事に高評価をいただいた読者からは、「レバー操作の方法など写真と図があり分かりやすい」「1ページにまとまってよかった」などのコメントがありました。



第101号で復活させて以来シリーズ化している「高尾の四季リターンズ」には、「写真が奇麗で目を引いた」「見やすく構成され、解説も丁度よい分量だった」という書込みを頂戴しています。

第101号から3回にわたってトピックとして紹介した木製案内板の制作過程については、「研修生への配慮が伝わって来た」とのコメントをいただき、発案から設計・施工まで半年をかけて携わった者として感慨深いものがありました。9月の雹や数次にわたる台風襲来にも耐え、今も静かに研修生を案内しています。

今後においても各号の内容について忌憚のない御意見をいただきたく、設問を簡素化して読者アンケートを実施します。p.1 タイトル右下のリンクのクリックとQRコード読取りのどちらからでもFormsの質問サイトに飛べますので、御回答をよろしくお願いいたします。

???????? FTIクイズ・答えとプチ解説 !!!!!!!!!!!!!

A1：答えは③の「約800m」です。

JR沼田駅から車で約50分。関東森林管理局利根沼田森林管理署が管轄する国有林に囲まれた場所に立地し、実習林（137林班など）へ短時間で移動できます。

標高が100m高くなると、気温は0.65度下がります（気温減率）。機械化センター付近の気温は標高0m地点と比べて約5度低いこととなりますので、受講等で来所される際は服装等にお気を付けください。

写真左：冬季の機械化センター（積雪期は、翌シーズンの研修準備や機械の点検・整備等を行っています。）

写真右：令和6年12月23日11時の気温（上：センター、下：本所）。アメダスデータによると、沼田市の平均気温は八王子市よりも3度程度低く、年間の冬日日数は八王子市の約2倍です。



A2：答えは②の「木（スギやブナなどの樹種）」です。

宿泊室の腰壁と扉の鏡板には、全国各地から集めた木材（18樹種30種類）を使用し、多様な使用方法のモデルとなっています。

なお、同じ樹種でも産地が異なれば別のものとしてカウントしました（スギは静岡、奈良、秋田、徳島、鳥取の5種類）。



FTI News | No. 105

林野庁 森林技術総合研修所

〒193-8570 東京都八王子市廿里町(とどりまち)1833-94

TEL | 042-661-7121(総務課) / -3560(教務指導官室)

-3565(技術研修課) / -3567(経営研修課)

URL | https://www.rinya.maff.go.jp/j/kensyuu/kensyuu_zyo.html

林業機械化センター

〒378-0312 群馬県沼田市利根町根利1445

TEL | 0278-54-8332

URL | https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikai/kikai_ka_senta.html



バックナンバーはこちら